手話のオラリティとアジアろうコミュニティでの社会貢献への応用～フィリピン中部の手話

斉藤くるみ

はじめに

言語を論じるときに、しばしばオラリティとリテラシーという概念が出て来る。オラリティ(orality)とは伝承とか口語というような意味である。oral は口頭・口述という意味で、ろう者に声で話すことを強いるやり方を口話主義というがこれは英語で oralism という。

私たちが日ごろ話しているのは音声つまり oral な言語であり、それを文字で書くときにはリタラシーという。文字は、目で見るものであり、つまりはオラリテイは聴覚、リタラシーは視覚に言語をとどめることである。

手話は音声言語とまったく違う文法をもつ視覚言語であるにも関わらず音声言語と同じように脳の言語野で生成されていることが 1990 年代に明らかになった。手話の理論研究では 「音素」という概念を使うことは既に常識であり、手話の音素や音韻論の存在は音声言語と手話が本質的には同じ「言語」であることの証明でもあるのだが、「音」という文字が含まれていることに違和感を唱える研究者もいる。それと同様に「オラリティ」と「リテラシー」いう用語・概念、そして オラリティからリテラシーへという理論は、手話研究においては大変違和感がある。手話は元来 oral なものではない。リテラシーは音声言語を「可視化」するという大きな飛躍を意味するのであるが、その点では手話は最初から可視記号である。リテラシーが道具や技術で言語を記録したり、発話者のメタ認知を促すものとするならば、録画の技術はリタラシーと呼べないか。日本社会事業大学では「日本手話」を母語とするろう者に手話動画で修士論文を提出することを認めた。これは一般でいうところの oral なものでも literal なものでもないが、この論文の言語、「日本手話」はオラリティもリテラシーも持たない言語と言うべきなのだろうか。

従来言われてきたオラリティは音声言語のみを想定して提唱された概念であり、聴覚モダリティから視覚モダリティへの転換がオラリティからリテラシーへの進化に必須であるかのように考えられてきた。そのことは言語の本質をつかみきれていなかったことを示すものである。本研究はオラリティとリテラシーの理論を見直すものである。また手話のオラリティ研究の過程で得られた資料はアジアのろうコミュニティのリスクコミュニケーション構築に寄与し、手話のオラリティの仕組みの解明で得られた知見は手話通訳者養成に貢献すると考え、最終的に災害手話として有効なものを集め、国際協力に携わる人や手話通訳士、ろう当事者に発信し提供することを最終目標とする。

その中で今年度の研究成果としてはフィリピン中部東ビサヤ地方のカルバヨグおよびレイテ島のろう者の手話を題材として、オラリティとリテラシーの存在を探った。この地域は 2013 年に巨大台風ヨランダの被害を受けた地域であり、とくにレイテ島のタクロバンは壊滅状態になった。この地域のろう者に被災体験の話をしてもらい、その手話を観察した。

１．手話のオラリティとリテラシー

手話の言語性が認められる以前の理論研究はモダリティに惑わされて言語の本質を見ていなかった。重要なのはモダリティとコードの関係である。たとえば日本における状況を例に挙げると、ろう者は、日本手話（コード A とする）という特別な構造をもつ言語（視覚モダリティ）でコミュニケーションをとり、同時に自身にとっては聞こえたことのない、そして構造も手話と全く違う外国語ともいえる音声日本語（コード B とする）を文字（視覚モダリティ）だけで、十分ではないが、理解している。一方視覚障害者の場合は日本語（コードB）を音声（聴覚モダリティ）だけで認知し、情報を得る人もいるが、それに加えて点字（触覚モダリティ）を使って情報を得る視覚障害者もいる。さらに盲ろう者は音声も認知せず、視覚記号も認知せず、音声日本語（コードB）を指点字や点字のみ（触覚モダリティ）で理解している人と、触手話（触覚モダリティ）で日本手話（コードA）を理解する人に分かれる。 日本語とはあるコード（コードB）を聴覚モダリティによって、生成し、理解するものであり、リテラシーとはそれを二次的に文字に変換したもの（コードB&視覚モダリティ）とされているが、視覚や聴覚に障害のある人たちにはそれがあてはまるとは言えない。最も興味深いのは、手話は一見オラリティがなく、かつリテラシーもない（世界の手話には音声言語の識字と呼べるものはない。）のだが、例えば「日本手話」は、言語ではないのか、という問題である。しかし脳科学的には「日本手話」（音声を手指記号に変換した「日本語対応手話」ではなく）は、ジェスチャーを生成する部位と違う「言語野」で生成されている。手話は発せられてはすぐ消える線状（linear）の音声とは全く違う構造を持ち、手の形、動き、位置と眉上げや視線や頷きなどの記号が総合的に意味を構成するものであるし、静止した状態を作ることもできる。これほど異質な特徴を持つ手話であるが、音声言語の研究から生まれた音韻論は今のところ手話を分析することに成功しており、大幅な見直しを必要とされてはいない。つまり音声言語と手話は表面的なモダリティとは関係ない抽象的なレベルで言語の本質を同じくするのである。そもそも言語のオラリティとリテラシーは、言語の真実なのか。オラリティ対リテラシーとして論じられていたことは、手話を対象とすることによって修正を余儀なくされるのか。それとも言語の本質にオラリティとリテラシーという概念を置くことはモダリティに関係なく言語の本質として必然なのか。

視覚・聴覚に障害のある人々のもつ言語は決して言語として不完全とは思えない。そうであるならば、オラリティとリテラシーをモダリティに惑わされず、たとえば、リテラシーの本質は自然な発話から道具・技術によって二次的に記録されたもの、送信者・受信者が自分の意志で送信・受信の速度を変えられるもの、受信者と送信者の認知が同時的ではないもの、表現が固定されたもの等々という要素をもって考察しなおすべきである。

オラリティの研究は、W. J. Ong（1982）の Orality & Literacy に端を発するが、そこで彼は言語の原点がオラリティ、つまり音声による発話であるとしており、そもそも音声

のない手話は想定していない。一方、リテラシーの出現は自己の意識の進化である（from “self consciousness” to “reflectiveness and articulateness about the self” and “highly personal interiority” ）と Ong が言うときに、「見える」ことをその根拠のひとつとしているのであるが、手話は最初から「見える」ものである。続く研究者たちも、オラリティとは、文字通り言語を音声ありきとして議論を進めて来たのである。しかし、L. Polich はニカラグアで新たにできたろうコミュニティーとニカラグア手話の形成について研究する中で orality という概念がろう者を完全な人間ではないという印象を持たせる（“Orality is an ideology with ominous implications”）と指摘している（Polich 2001）。

手話研究により、言語学は修正を余儀なくされた。つまり「言語というのは人間が自然に生み出した、声で発し、耳で聴くものであり、それを視覚記号化した文字の言語は二次的なものである」という『常識』は間違っていたのである。日本手話やアメリカ手話のように、ろう者が自然に生み出した手話には「音」は存在しない。（日本語の音素や形態素を日本語のままの語順で手で表す「日本語対応手話」とは構造が違う。例：「彼は彼女が好きだ」は、日本手話では「彼」（右手）というサインと「彼女」（左手）というサインを同時に表し、次に「好き」のサイン、次に右から左に向けた指差しを出す。）そして音声言語のように一つの口で一つずつ順に音素を発するような linear な構造と違う。この自然な手話を発したり、見て理解するろう者の脳の動きは、聴者がジェスチャーを発したり理解したりするときの脳の動きとは全く違って、聞こえる人が音声言語を発したり理解したりするときの脳と同じ活動をしている。これこそが『言語』であり、つまり「音」と「言語」の必然性的な関係はなかったのである。 手話には「音素」がある。これは今や常識である。しかしこれは「音のない音素」である。手話にも「発音」の違いがある。しかしこれは「音のない発音」である。同様に「音のないオラリティ」があっても不思議ではない。

本研究により、「オラリティ」と「リタラシー」という概念・理論も修正を余儀なくされるのではないか。「オラリティ」と「リタラシー」は、言語と音声を必然的に結びつけていた（誤り）時代にできた概念だからである。多くの研究者が「オラリティとリタラシー」≒「聴覚モダリティと視覚モダリティ」と思い込んできた。音素は音によると思い込んでいたからだ。しかし、手話には音声がなく、したがってオラリティもない、言語ではない、と言った Ong でさえ、オラリティとリタラシーの二段階ではなく、オラリティが二段階（primary orality と residual orality）からなると言っている（Ong 1982）。音のない世界で生きるろう者のコミュニティーで自然に発生し、彼らの絆であり、文化的アイデンティティでもある手話は、オラリティと無縁に見えるがゆえに蔑視されてきたが、オラリティあってこその言語であるという考え方が、手話の言語性を認めることの支障となり、リテラシーの前提となるオラリティすら手話には存在しないのであるとして、ろう者は完全な人間でないような扱いを受けることもあるのである（Polich 1999）。 文字のない言語は多数あっても、音のない言語は手話しかないと思われる。

一方、手話という言語はリタラシーを生み出すことが不可能だという思い込みも、ろう

者・手話者を蔑視させる要因であった。先進国も含め、世界のろう者はこれまで手話を文字であらわす方法を発明・開発することはなかった。その理由は音声言語話者に取り囲まれているために、マジョリティの音声言語を、聞くことはできなくても、文字にしたものを習得することは便利であり、必須だからである。(但し、その国・コミュニティの言語が文字を持つならば、である。世界中には文字のない言語がたくさんある。) もうひとつの理由は、手話は音声言語のように線状 (linier) の構造ではなく、右手・左手・視線・眉上げ・頷き・姿勢などがすべて音素であり、それら複数の音素が同時に発せられるため、文字という二次元の紙の上に書く記号を開発することは困難であるからである。現在手話の記号 (文字) 化を試みている研究者もいるが、それは手話者の識字を念頭に置いているわけではなく、むしろ手話の国際比較や手話の分析のため に開発されたものである。その一例である Ham-NoSys は記号が多く、複雑で、一秒ほどの手話表現に１０個もの記号を並べなければならないこともある。このような記号はその手話固有の音韻体系に則したものではなく、想定されるあらゆる手型・動き・位置、それにともなう視線・眉上げ・頷きなどの言語記号を表現できるものとして開発されているからである。

手話教本は DVD 付きで売られることが多いが、これは英語の CD 付きの教材と同じで、そのまま話すと人工的で自然ではない。何度も撮りなおして録画した手話教材はオラリティを表しているとは考えにくい。つまり手話も記録するテクノロジーが出現してから、オラリティとリテラシーの違いが顕在化してきたのではないか。

手話の言語性を証明しようともせず、言語扱いしなかったことの原因は、音声言語話者の「オラリティ」という概念と「リタラシー」という概念の両方にある。しかし、２０世紀後半、一部の言語学者が手話は言語であると証明してきたことは脳科学に裏打ちされた。オラリティとリタラシーの脳科学的な意味は角回 (angular gyrus) 等にあると思われる。文字を持たない民族の「角回」はどうなっているのか、を考えれば、モダリティとは関係のない「リタラシー」の真の意味が見えてくるであろう。

２．研究の目的と方法

研究者の理論からしても、一般の人々の直感からしても、オラリティという概念がゆえに手話の言語性が認められにくいことは実感できる。オラリティとリテラシーは聴覚から視覚へのモダリティの転換がなければ存在し得ないのかをまず考察する。今や録画が簡単にできるようになり、ろう者の手話は記録され得るものとなり、自然な発話とは別に、手話の教本に載るような語・句・節・文が固定化されてきた。これはリテラシーではないのだろうか。本研究の目的は、第一に、オラリティとリテラシーという概念が手話に当てはまることを明らかにすること、第二に、オラリティをモダリティと混同せず、見直すこと、第三に手話のオラリティ研究の成果をろうコミュニティ及びろう国際社会に提供し貢献す

ることである。

筆者はろう者の防災・減災に貢献するためにアジア共通の災害手話を開発する中で、自然な手話にはアジア各国で intelligibility があるものも多く、その理由として iconicity と CL （フリーズして語彙になる以前の手話）の存在があると推測した。また intelligibility は、語レベルよりも、句・節・文のほうが高い。これは統語論レベルでの手話の iconicity（例「来る」 「行く」の方向等）と固定されていない CL という表現に根拠がある。これらは日本では、教育を十分受けられなかった高齢者による、記録を意識せず自然に発せられた手話に豊富であり、教育を受けた若者の、日本語に影響された手話には少ないと言われる。従ってこの iconicity と CL が 手話のオラリティに貢献しているのではないかと考える。そこで研究方法としては、アジア のろう者たちの間で intelligibility の高い手話表現と iconicity および CL の相関関係を確認する。（その後、日本語教育にあまり影響されていない日本の高齢者の自然な手話から表現を取り出し、若者の手話と比較したいと考えている。）

つまり手話のオラリティと intelligibility に関係があると仮定し、それが従来の研究者のいうオラリティと矛盾しないことを示していく。そして教育・文化によって固定された手話をリタラシーの概念で説明する。オラリティとリテラシーはモダリティに影響され、線引きされて二つに区別されたが、原点から視覚モダリティによる手話を題材にすることによって、それが二種類ではなく、段階的なものであることが示せるのではないかと考えた。

最終的には研究の過程で得られた資料および知見を国際協力に携わる人や通訳士のトレーニングに活かし、アジアの連帯に貢献するリスクコミュニケーションをろう当事者に提供したい。

本研究でいう手話とは「日本手話」や「アメリカ手話」のようにまったく音声を持たないろう者が自然に生み出した手話のことで「日本語対応手話」や「手指英語」のように音声言語を手指で表したものではない。

今年度の共同研究では、フィリピン中部の手話を題材とした。カルバヨグのろう学校に学ぶ成人と児童およびタクロバンのろう者の教会に所属するろう者たちの手話を分析し、そのオラリティとリタラシーを探った。

３．フィリピン中部手話の分析

手話を観察できたフィリピンのろう学校は、貧しい生徒が多く、20 代３0 代になってやっと学校へ行ける人も少なくない。その中には成人するまで音声言語は勿論、言語としての手話も完全に獲得したことのない人もいる。そのようなろう者たちの手話はホームサインに近いものかもしれない。一方、年齢の低いろう者の場合、学校に来るようになって、

言語としてほぼ完成した手話を持っていると考えられる。後者の手話、すなわち記録しようとか、正しく教えよう、という動機（これは音声言語のリタラシー教育にあたる）に縛られない、ただ表現したい、あるいはろう者同士で話したい、ということだけを考えているろう者の自然な手話は「オラリティと」考えてよい。礼拝で使われる神父や助手役の手話は、あらかじめ発話することが決まっており、そこに現れる手話は文字で記録できるものと本質的には同じでありリタラシーにあたると考えた。これら二種を比較したところ、

１．オラリティ性の高い手話の最も大きな特徴として CL（classifier）が多いことと、iconicity の高い表現が多いことが挙げられる。

２．CL と iconicity が豊富であると、日本手話者でも理解しやすかった。つまり intelligibility が高くなる。

3. 儀式で使われる手話はフリーズ語彙が多い。

４．教育を十分受けずに年齢が高くなった人の一部にはフリーズ語彙でもなく、また iconicity も見られない、ジェスチャーのようなものが表れることがあり、誰にも通じないようなサインも出現する。

以上の詳細は研究紀要に掲載する。

今後は他のアジアの国の手話との intelligibility を調べるとともに native signers と non- native signers の比較、高齢者の手話と若者の手話の比較等をすることで、手話のオラリティが存在することを確認していきたい。

おわりに

手話が、言語学的にも脳科学的にも言語であることは既に常識であり、手話の音素や音韻論の存在が証明されたことも、音声言語と手話が本質的には同じ「言語」であることの証しである。しかし音素や音韻論という用語に、「音」という文字が含まれていることに違和感を唱える研究者もいる。それと同様 に「オラリティ」と「リテラシー」という用語・概念、そしてオラリティからリテラシーへという理論が、音も文字もない手話に当てはまるということは受け入れられないかもしれない。であれば、オラリティとリテラシーは言語の一部でしか言えないことであり、言語の必然ではなかったということか、あるいはオラリティ―とリタラシーはモダリティと必然的な結びつきのない言語の普遍的な特徴なのか、二つに一つである。

リテラシーが道具や技術により言語を記録できるようになり、発話者のメタ認知を促すようになったことを指すのであれば、意識的に手話動画用に表現する手話はリタラシーと呼べないだろうか。従来のオラリティの理論研究は、モダリティに惑わされて言語の本質を見ていないのではないか。

本研究はオラリティという概念そのものを研究するものである。音のない世界で生きる

ろう者のコミュニティで自然に発生し、彼らの絆であり、文化的アイデンティティでもある手話は、オラリティと無縁に見えるがゆえに蔑視されてきた。オラリティあってこその言語であるという考え方が、手話の言語性を認めることの支障となってきた。しかし、そもそもオラリティの本質は何か、「音」と必然的な関係があるのか。手話のオラリティを探ることで、オラリティの本質のみならず、モダリティを超えた言語の本質が見えてくると考える。

（本研究は、科研特設分野基盤Ｂにて継続されることになった。）

参考文献

Aronoff, Mark, Irit Meir and Wendy Sandler, (2005) "The Paradox of Sign Language Morphology," *Language*, 81- 2 (http://www.ncbl.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC 3250 214/)

Fujii, Katsunori, (2015), "The Great East Japan Earthquake and Persons with Disabilities Affected by the Earthquake — Why is the Mortality Rate so High? — Interim Report on JDF Support Activities and Proposals," *Report on the Great East Japan Earthquake and Support for People with Disabilities*, Japan Disability Forum (JDF).

Kent, Mike and Katie Ellis, (2015), "People with Disability and New Disaster Communications: Access and the Social Media Mash-up," *Disability & Society*, Vol.30, No.3, 419-431.

Meir, Irit, Carol Padden, Mark Aronoff and Wendy Sandler, (2013) "Competing Iconicities in the Structure of Languages", *Cognitive Linguistics*. Volume 24 (2), 309–343,

Meir, Irit, (2012) "The Evolution of Verb Classes and Verb Agreement in Signed Language," *Theoretical Linguistics* 38, 145-152.

Ong, Walter J. , (1982) *Orality and Literacy*, Routledge.

Perniss, Pamela and Gabriella Vigliocco, (2014) "The Bridge of Iconicity: from a World of Experience to the Experience of Language," *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Science. 369* (http://rstb.royalsocietypublishing.org/content/369/1651/20130300)

Polich, Laura, (2001) "Education of the Deaf in Nicaragua," *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 6-4

Taub, Sarah F., (2001), *Language from the Body: Iconicity and Metaphor in American Sign Language*, Cambridge University press.